

無痛分娩の説明と同意書

当院が提供する無痛分娩についてご説明いたします。

陣痛の痛みに対してご不安を持たれていたり、痛みの軽減を求められる妊婦さんに対して陣痛の痛みを和らげご出産に対して前向きに望めるようにしていただくことを目的としています。完全な無痛を目指しているというより、赤ちゃんにもなるべく負担がかからず妊婦さんの産む力を最大限に引き出してくれる有力な方法として無痛分娩を行っています。

以下に方法をご説明いたします。ご理解いただき納得された場合には、同意書にご署名をお願いいたします。またご質問は随時受け付けておりますのでご遠慮なくお聞きください。

【方法】

A:硬膜外カテーテル挿入法

麻酔科専門医により行います。背中から硬膜外カテーテルという細い管を入れて麻酔薬を注入する方法を取ります。手術の時に使っている方法です。手術をしている状態と変わりはありませんので適時バイタルサイン(血圧、心拍数、酸素飽和度など)を測定します。

- ① 計画分娩とともに行うことを原則とします。計画分娩の方法としてはメトロイリントールという水風船のようなものを子宮内に入れる方法、オキシトシンという薬を点滴で注入する方法などがありますが、初産か経産か、頸管の状態によって決めますのでお一人お一人異なります。
- ② 食事をしてしまうと合併症が起こったときにリスクがあるので、朝食は食わずに点滴で補液をします。
- ③ 入院日は、前日入院の場合と当日朝入院の場合がありますが、お一人お一人状況は異なりますのでご相談になります。予定していた日より前に破水が起きたり、陣痛が来た場合にはその段階で対応しますが、お産の進みが早い場合には間に合わないことがあります。あらかじめご了承ください。
- ④ 陣痛の痛みが起きたらお薬を注入開始します。お産が終了したらカテーテルを抜去します。その後は無痛分娩をされていない方と何も変わらずお過ごしいただけます。
- ⑤ 合併症が来た場合には中止することがあります。

B:痛み止めの注射をする方法

- ① ペチロルフアンという薬を筋肉注射する方法です。
- ② 少し眠気が起こる場合があることと、硬膜外カテーテル法と比較すると鎮痛作用は一定ではなく人により差があります。
- ③ 多量に使用できる薬では無いため鎮痛作用が思ったほど得られない場合があり、追加投与は難しいです。

【合併症について】

① 微弱陣痛による分娩遷延

陣痛が弱くなることがあり、その結果お産が長引くことがあります。

機械分娩（吸引分娩、鉗子分娩など）になったり、子宮の収縮が悪くなり出血が多くなることがあります。

② 血腫

カテーテルを挿入している部位に血の塊ができることがあります。神経を圧迫して症状が出る場合には治療を要することがあります。

③ 血圧低下

麻酔薬によって血管が拡張するため血圧が低下したり、胎児の心拍が低下することがあります。時間が経過することで改善することが多いです。

④ 脊椎麻酔になってしまうことがある

硬膜が傷つくことで脊椎麻酔になってしまうことがあります。場合によっては呼吸障害など重篤な合併症を引き起こすことがあります。そのために始めに麻酔薬を少量注入して様子を見てから始めています。十分安全に配慮して実施しています。

⑤ 頭痛

頭痛が起きたり、出産後まで長引くことがあります。

⑥ 排尿障害

一時的に尿を出すことが難しくなることがあります。通常は経過観察で改善します。

⑦ 感染

十分消毒をして清潔操作をしていますが、皮膚の常在菌による感染が起きることがあります。

⑧ 腰痛、背部痛、下肢のしびれなど

麻酔薬によることもありますし、原因が不明の場合もありますが、このような症状が起きることがあります。

⑨ 局所麻酔薬中毒

麻酔薬による中毒症状が起きることがあります。この場合には中止します。

いずれにしても合併症が起きた場合には中止して、適切な対応をさせていただきます。

無痛・和痛分娩同意書

無痛・和痛分娩の説明を受け同意いたします

年 月 日

説明者

みなみ野グリーンゲイブルズクリニック
院長 桑江千鶴子

ご本人

同意者